

人類が見た夜明けの虹

——地域からの世界史・再論——

前口上

二〇一一年エジプト民衆の革命精神。それは、明けそめた蒼穹^{蒼穹}に巨大な弧を描く希望の虹だった。やがて儂^{はかな}く消えるのが、虹。だが、その虹を、人々が険^{まがた}に焼きつけてしまった事實は消えない。やがて世界中の人々が大氣を胸いっぱい吸い込んで、虹が懸けた橋を渡ろうと歩きだすのを、だれも阻むことはできない。人類史の新時代は、このようにして幕をあける。かつて、アクエンアテン王^{前四世紀}の「光の宗教」¹／ダレイオス一世やアレクサンドロス三世の「帝国」²建設³（前六世紀末〜前四世紀）／が映し出した革命がそうだったように。そして民衆の役割が可視化さ

板垣 雄三

れるにおよんで、イスラームの国民^{ウレマ}の形成（七世紀初）／独立宣言や人権宣言を生み出したアメリカ革命とフランス革命（二八世紀末）／コミンテルンをはみだす東方諸民族大会（一九二〇年、バクー）³の姿／などが、そうだったように。

一 「地域からの世界史」への私の視座

タイトルに「再論」と謳うからは、前提となる私の立場の概略を示しておかねばならない。私が「地域からの世界史」について私なりの仕事を公表するようになってから、六〇年が過ぎた。⁴その間、私は、中東の社会と文明から、それらを世界的脈絡の中で／かつ日本国のあり方にひきつけて／観察する作業をつうじて、多くのことを学んだ。一

九六〇年代後半には、「地域」を、所与の固定的な単位と

してでなく、時間・空間・主体がダイナミックに結合する「場」の動態(選り分け・組み替えによる変換/変容/変態/変質/揺らぎ)としてとらえる私の基本的スタンスが、ほぼ固まった。地域は、同心円的に、また足し算・引き算的に、伸縮するばかりでない。飛び地の集合が共通課題で結びついて一つの地域となったり、あらゆる方向に仮足をぐいと伸ばすアムール運動を呈したりもする。こうして「地域」は自由に伸び縮みして可変的だが、その最小は個人ないし個人の立ち位置、最大はさしあたり地球および宇宙空間の一部。その間に無尽蔵の「地域」が詰まっている。

ここから、私は「n地域」および「アイデンティティ複合」という二つの理論を、相互に支えあう作業仮説として、並行的に組み立てた。

「n地域」論では、階層的な差別システムを維持・再生産する力P、重層的差別をのりこえ連帯性を獲得的に実現する民族運動Q、それに対応・対抗するイデオロギー的政治支配をしつらえ楔として打ち込む民族主義Rとして、PR vs. Q(帝国主義・民族主義体制対民族生成的抵抗)を主要争点とするようなマルチサイズの/無限に代入可能な/地域nを考えた。それは、むしろ多重の地域複合の中の一分節ないし一断面という意味をもつ場合が多い。こう

の二項対立操作などのりこえ、人間の多元的アイデンティティの社会化を意味する。社会成員にとつてのアイデンティティの選択肢から、世界史を構成しなおすことができ、それは「n地域」設定とも深く関連しあう。

つぎに、私は「ネットワーク」と「パートナリシップ」について、あらゆる連結成分が「まんなか性」^⑤はじっこ性」を同時に体现するという観点から考察した。それは欧米中心主義の二項対立的二分法の思考に対する批判で、イスラームのタウヒード *tawhid* (一つにすること、1と決めること、「多即一」、多元主義の普遍主義思想が重要なヒントとなる。ネットワークはタウヒード的組織原理の社会的実現。世界史における「近代性」^⑥は、七世紀以来イスラームのネットワークリング過程をつうじて始動された展開として認識される。この「超近代性」^⑦が欧米中心主義的(近代)理解を克服する未来ヴィジョンをもたらす。その実地検証の「とき」が来たことが、本稿の中心テーマだ。

タウヒードへの視角は、シンクロニシティ(共時性)意味深い偶然の一致現象が因果的に複数生起すること。分析心理学者カール・ユングがウンズ・ムンドウス^⑧に関連させて考究/非局所性時・空を隔てた事象が相互に影響しあう性質をもつこと。量子力学の概念/モノイド(窓がない)無数の自足的実体だが「宇宙を映す鏡」として相互に暗黙の調和した対応関係をもつ単子。一

して一小村落における/をめぐる/闘いが地球大の政治を映す鏡となり、市井の一個人の内面の惑いや社会的行為の岐路が世界史の有意の論題たりえることになる。どんな「n地域」を設定するかが、世界史を見抜く眼力と深くかわっているのだ。歴史の中で関心対象となる場を、たえず「n地域」化する(多層多重化・多角化・多次元化の中で考える)ことが必要ではないか。自分の「蛸壺」を出て、「自分にとつての世界」を組み替え変革する多様な可能性を探求すべきだ。

「アイデンティティ複合」論は、各個人が(性別・血縁・地縁・「族」的结合・帰属集団・宗教宗派・職業・身分・国籍など)数多の異なった「自分」のあり方//わたしn//をもつていて、たえず状況の中で状況に働きかけるべき「自分」を主体的に選り分けつつ生きること(アイデンティティ選択を問題にする。内面に多様な「自分」をもつのは、自分をネットワーク化すること。アイデンティティ複合は、けつして人格分裂や多重人格や風見鶏や事大主義ではない。雑多な人々の集合である「都市」的状況とは、モノの値を合意して取引し/コミュニティをつくり・つくりかえる/生活現実の反映だ。都市化・商業化・政治化の過程を生きたる「都市人間」の「アイデンティティ複合」状況は、時代を超え生活形態の多様性を超えて生じる。それは、「公・私」

八世紀初めライブニッツが提起した形而上学的概念/共鳴・共振(外部からの刺激に対して固有振動が起きる物理現象/などの意味を、「地域からの世界史」問題として吟味するように促した。

二一世紀開幕とともにじまったグローバル「反テロ戦争」の現実のもとで、以上の私の立場にはつぎの三つの新しい視点が加わる。

第一は、欧米中心主義につきまとう植民地主義・人種主義・軍国主義への視点。これは、ことに植民者国家としての米国とイスラエルについて顕著な問題。それらと野合する日本についても、特異的に同様の問題が浮上する。エミシ・エズ征伐による領域拡大/資源略奪/「俘囚」化的統合/をつうじて「征夷」大將軍を戴く武士団権力が成立し、それが一九世紀半ばまで持続。アイヌ騙し討ちをかさねる破廉恥の半面が「和」のころや「武士道」の精神性。「北海道開拓」「琉球処分」「征韓」「台湾統治」「滿蒙開拓」は、米国の民族浄化やシオニズムの植民運動と同時符合する動き。「反テロ戦争」はサムライ精神への回帰を求める声を呼びさます。

第二は、情動を操作する「反テロ戦争」に対して、①集団結集(「族」的結合・宗派結束・ナショナリズムなど)、②個人の尊厳・自立、③人類意識、という等位の三点を円環状に

循環しつつ上向するスパイラル運動、の必要性への視点。この絶えざるアイデンティティ選択の循環運動の起動力は「自己批判」。スパイラルの上向性を促進するのは「対話」。

第三は、「反テロ戦争」において加害・被害の交錯を克服するため、両側で報復・先制を競う暴力の共犯または片側で正義を独占する暴力への反感という対立固定化の二者択一を転換する関与行動への視点。「反テロ戦争」下の経験の「知識」化・「倫理」化・「功德」化が重要で、これを達成させるのも「自己批判」に支えられた「対話」。

以上が、二〇一一年に先立ち、「地域からの世界史」に關して私が準備してきた問題観、方法上の主張・予知の概略である。残念なことに、中東・イスラーム研究者でさえ、中東の政治変化の到来が「想定外」だった、と告白する人が目立つ。私はかねがね、中東の一九七九年体制の崩壊が不可避であることを予告し、その条件を検討してきた。

二 中東から世界に広がる波紋

二〇一〇年末西サハラとチュニジアではじまった市民決起は、二〇一一年年頭のチュニジア政変をもたらし、二月エジプトでホスニー・ムバラク政権を倒壊させる。これらは、グローバルにつながりあう市民たちに、彼らが立ち

イツ・スイス・スペイン・イタリアはじめヨーロッパで環境・反原発運動の新たな高揚。英国ではスコットランドの独立を唱えるSNPが選挙で過半数を制する。ベラルーシ市民の首都ミンスクは十月広場での偽装デモ。これらはどれも、中東の革命とたちまち交感し感応しあう共振・共鳴現象の発現ないしその予兆であり、こうした相互作用が世界中で顕著に観察されたのである。八月には、イスラエルでも、生活苦に抗議する市民デモが、エジプトに続けと史上空前の規模で発生するにいたった。

東京電力福島原発の三・一一事故の深刻化に直面する日本では、全国一四〇カ所をつなぐ六・一一反原発デモの大波が巻き起こる。そのコーディネート松本誠(一九七四年生まれ。東京でリサイクルショップを営む自称「素人」活動家は語る、「デモは直接的な政治参加。怒りやメッセージの表明こそ、本当の意味での民意だ。『われわれにとつての』モデルは中東で起きた革命。『そのおかげで』われわれは変なモヤモヤを脱けだし、ようやく我に返ったのです」。一九四五年(広島と長崎)や一九五四年(ヒキ環礁水爆実験)の惨禍を体験した日本社会では、米国の核の傘のもとで「原子力平和利用」一辺倒をバラ色に描く強力な世論操作・方向づけが久しく効力を発揮していた。この政治・社会風土に地崩れが生じ、脱「原発依存」志向が優勢に転じるのは、

上がって抗議の声を集中すれば、強権政治の鉄壁であれ、民主主義の機能不全であれ、突破することが可能だという希望の未来をひらいて見せた。

それは、たちまちアラブ諸国をはじめ中東を覆って燃えさかる民衆決起を呼びこみただけではない。それへの応答や呼応が世界的に広がりで示された。

沖繩で米軍基地撤去を求める市民たちは、沖繩住民の自己決定権の有望を胸に、カイロはタハリール広場の群衆に熱い連帯の挨拶を送っていた。米国ウイスコンシン州で公務員組合の団体交渉権をめぐる起きた州庁舎の市民占拠中国でネット上を飛びかかった「中国茉莉花革命を」の希求。その中国で内蒙古・湖北・広東・河南から発火した少数民族や出稼ぎ労働者の反乱が蔓延、ウイグル人・回族・チベット人の動揺深まる。そして高速鉄道事故が引き金の公然たる政府批判の拡大。インドでは首都での活動家アンナ・ハザレの反汚職腐敗「断食」闘争に連帯する抗議運動／マハラーシトラ州ジャイトプルやタミルナード州クダンクラムでの原発建設反対運動を支援する「遍路」運動／などが全国化。国際政治に翻弄された末の南スーダン独立だが、アフリカ各地に波紋が広がる。バーデン・ヴェルテンベルクで緑の党が躍進して州首相の座を握り、イタリア国民投票で圧倒的に巨大なうねりが生じたように、ド

六・一一デモの前後から。デモを黙殺した政界やメディア主流の内部では、潮の変化に敏感な適応の仄めかしも。そして、これへの強力な切り返し。東京での九・一九「さよなら原発」集会デモは、それへの抵抗の一步だった。非暴力直接行動に起つ市民の政治的力量が問われている。

六〇七月のスペインを見よう。失業拡大・社会サービス劣化・教育費高騰などを社会的に不正・腐敗・本物の民主主義の欠如として抗議し、政治変革を要求する市民「『憤激者たち』」が、マドリッドのプエルタデルソル広場に一大野営地を出現させた。それは、国内諸都市に発生したキャンブ群さらにパリ・アテネ・ブエノスアイレス・ボゴタ・ブリュッセルなどの「憤激者たち」と連携。各地集会の議論が相互に参照されるだけでなく、仮にソルキャンブが潰されても各地集会が引き継ぐ態勢が固められる。抗議者たちはキャンブを清掃、ゴミを再生、通行人のため通路や周回路を確保する。多数市民が食料や資材を運んで支援した。カイロのタハリール広場の再現が自覚されていた。

三 なぜ中東で革命が起き、それが世界と繋がるか

中東にはじまる市民決起が上記諸例のような反響を世界

中で呼びまされたのは、なぜか。軍事戦略・情報管理・金融操作を駆使する欧米中心主義の覇権主義的・新自由主義的グローバル化が、国・地域を越えて人々の苦境と課題意識を均質化させ、怒り・抗議・抵抗のグローバルな連携を促進したから。しかも、そこでパレスチナ問題があらためて象徴的に、不公正・不正義の世界の「結び目」的表象と意識されているから。

欧米社会に固有の反ユダヤ主義がホロコーストを結果したことは、欧米中心主義にとつて歴史的な重荷だ。欧米はその「償い」と称して、自らの痛みによるのでなく、パレスチナ人を犠牲にして、「ユダヤ人国家」を設定し擁護してきた。このカラクリは、世界の民衆のあいだで直感的に見抜かれている。ポストコロニアル植民地主義への批判が、ひろく共鳴・共振を起こさせる刺激剤となっているのだ。感覚が鈍っている例外は、日本社会くらい。

欧米でも、二〇一一年中東で起きた政治変化の衝撃とらえ方について、中東・イスラーム研究のあり方や社会的認識をめぐる、多様な反省・提言が現れた。だが概して、政治変化を各国の「民主化」という問題次元に封じ込めた模様だ。中東の市民決起が、パレスチナ問題批判を基底的な動機にすることにより、世界および人間の変革を目標とする意味をもつこと、すなわち今日の世界で自由・公正・

歴史的に、中東の庶民は、「長いものには巻かれる」式の狡知・打算で生きのびる反面、統治の正統性を不断に問う訓練をかさねてきた。毎週金曜日の集団礼拝のさいのバイア *bay'a* (統治者の名を挙げる説教に信者たちが立ち会うこと) で、統治者の権威を証する契約更新のテーマ行為が、それ。二〇一一年の中東のデモで金曜日が高ライイトとなるのは、休日で人が集まりやすいからだけではない。

もう一点、重要なのは、中東の市民たちが「中東諸国体制」を見る眼。現在の中東諸国の枠組は、第一次世界大戦後に英・仏が(一九二〇年サンレモ会議では日本も加担)、ついで第二次世界大戦後は米・ソが、中東を分割・区画し保守してきた人工の空間だ。アラブ諸国とイスラエルとの組み合わせは、トルコ・イランとも並列して、全体が一組の装置として設計された。

だが、このシステムは安定しない。一九五〇年代以降アラブの *sunna* 意識とアラブ民族運動の、一九八〇年代からは *umma* 意識とイスラーム復興運動の、挑戦に曝された。革命下の多民族国家イランを保全したのは、サッダーム・フセインのイラク・イラン戦争。湾岸戦争からイラク戦争までの過程は、クウェート国家を温存するかわり、イラクを分解させた。南北イエメン統合、西サハラ問題、南部スーダン問題、そして「反テロ戦争」下中東に

平等・安全・平和・同胞愛の実現を旨とするという、この潮流の真骨頂が、意図的に軽視されている。「アラブの春」や「中東の民主化」という「語り」に潜む欧米中心主義の悪あがきをどれだけ敏感に見抜けるか？それが、世界の未来像を掴む上で、認識の分岐点となっていくに違いない。中東の市民たちは、「民主主義」の謳い文句には疑惑・不信をいだき、むしろ原点としての「自由」を求めている。「民主主義」という言葉遣いの実態を見てしまったから。イスラエルが自負する「中東唯一の民主主義」を、南アの元大主教デズモンド・トウトウは、アパルトヘイトと同類の人種主義だと証言する。これに強く反発する米国社会。その米国が中東の「民主化」を旗印に「反テロ戦争」を推進。その実際の姿は、腐敗しかつ兇暴な独裁政権を中東各所で強化し利用するものだった。

もともとイスラームの政治文化では、自由・平等と熟議の政治とは重視されるが、民主主義の代議制や多数決原理には「授権」に問題があるとして留保的態度が見られる。選ばれた政治家が悪や過誤を犯したら、選挙民は彼を選んだ責任を甘受すべきでなく、彼の責任を問うべきだ、と考えるから。リーダーシップ *imama* は、公正な *Call* の確認をへて更新される契約という契機を失えば、不正な圧政 *zulm* に墮する、と見る立場だ。

おける米国版体制変革諸計画は、システムの結びの修繕または再編の企てである。

人工の中東「国分け」システムでは、凝集力が弱い「国民」意識は、アイデンティティ選択の優先度が高くない。二〇一一年に国旗を持ち出す市民がいたのは、世界変革へのステップを確認するもの。イスラエルと事実上持ちつ持たれつ「アラブ諸国」の現実。ナシヨナリズム反対で普遍主義のイスラームと背馳する「イスラーム諸国」の範疇的危機。ムスリムであれば、同胞のパレスチナ人の苦難をよそに放埒な生活を楽しんでいられるはずがない。庶民の厳しい眼が大統領たち・王族たちに向けられてきた。

ムスリムに照準を合わせる「反テロ戦争」には、国際的批判を浴びるイスラエル国家の存立のためのリスク管理競争という性質がつきまとう。テロを拡大再生産し、失敗と挫折を滋養とする「反テロ戦争」。その悪循環がトコトン泥沼化を拡大。それへの対処の責任を人類全体に拡散して分擔させることにより、反ユダヤ主義の歴史とその結果としてのイスラエル国家産出という欧米の払いきれない道義的債務を免責する自己破産プロジェクトという性格が、「反テロ戦争」から拭えない。

二〇一一年中東の市民決起が、チュニジアないし先行的に西サハラから前触れなく突発したと言うのは誤りだ。起

点は、二〇〇〇年のパレスチナ人の第二次インティファダ。パレスチナ人が自認するスムード *sumud* (堅忍不拔精神が、アラブ市民たちの心を揺さぶった。印象は感応と同調へと変わる。二〇〇二年破壊されたジェニン市や重包囲下のアラファート執務室が象徴するパレスチナ「自治」の惨状。二〇〇六年パレスチナ自由選挙でのハマース勝利とレバノンでのヒズボラーのイスラエル軍邀撃。二〇〇九年イスラエル「鉛の鋳物」作戦へのガザ市民の抵抗。米国人女性レイチェル・コリーの死から攻撃されるガザ支援船団まで、スムードが国際的に担われだしたことも証明される。

九・一一事件を機に「反テロ戦争」が開始されてまもなく、私は、インティファダが中東から世界へと連鎖的に拡がる時代が到来すると、つまり「世界のパレスチナ化」を、予告していた。イスラエルの占領支配に対する一連のスムード顕示と反応しあう並行現象が早く生じていたのは、エジプト。ムバラク退陣を要求する二〇〇四〜二〇〇五年「キフアアヤ(もう結構〜)運動」すなわち「タグイル(変革)を求めるエジプト運動」／二〇〇八年労働運動支援にはじまる「四月六日運動」／二〇一〇年夏アレクサンドリアの一青年の拷問死に抗議する「われわれみんながハリド・サイド運動」／など、勇気ある小グループ群の対

ハル総長ムハンマド・サイド・タンターウィの法的判断に挑戦、(2)コプト教会の首長シエヌダ三世は、信徒会衆にエルサレム訪問を認可することを拒否。ついで、エジプト人俳優ハリド・ナバウィがハリウッド映画「フェア・ゲーム」で共演したイスラエル人女優とともにカンヌ映画祭で脚光を浴びると、エジプト俳優組合は彼の除名手続を開始。もつとも、ナバウィはまもなくタハリール広場集会でのスターへと変身する。

一九七九年以来、人々の政治的・思想的立場は劇的に変遷した。エジプトのイスラーム運動における武闘派は、一九八一年サーダート大統領を殺害、ついで米国の支援下アフガンに展開、一九九〇年代にはエジプトで政府転覆とイスラーム国家樹立を目ざしてテロ活動に奔走だけでなく、それを米国内にまで拡大。だが、彼らの急進路線は袋小路にはまっっていく。「イスラーム集団」は、外国人観光客多数を殺傷した一九九七年のルクソール虐殺事件ののち、暴力放棄へと転向を開始、二〇〇三年暴力からの決別を表明。武闘派から批判されていた「ムスリム同胞団」指導部でも、世代交替が進んだ。他方、リベラルや左翼で政治的見識・経験の豊かな人々が、イスラーム運動に接近したり、人権運動に挺身したりして、「キフアアヤ運動」を支えた。この時期、庶民も各自、多様な政治潮流を潜りぬける体験を

権力抗議が粘り強く持続した。二〇一一年のカイロのタハリール広場は、その急膨張・大爆発。蹴散らされる百人・千人レベルの運動の数年間のスムードが、百万・千万レベルのそれを産み出したのだ。

エジプトが先行した理由は？ イラン・イスラーム革命とエジプト・イスラエル平和条約との交叉を機に再編された米国内覇権の一九七九年体制のもと、エジプト人の多くは「冷たい平和」へと逃避。それは彼らの心の傷となる。イスラエルとの接触・交流の「正常化」は、作家・科学者・ジャーナリスト・外交官・企業家・宗教指導者・俳優・ポップ歌手に態度決定を迫り、エジプト社会全体を巻き込む社会文化的争点と化した。やがて人々は、ムバラク政権の打倒こそ自分の人間性を取り戻すための行動と意識するまでになる。

二〇〇〇年。私はイスラエルが嫌いの絶唱への人気がシャアバイン・アブドッラヒームを町の洗濯屋の片隅から一躍スター歌手の座に引き上げたのは、まだガス抜き段階。深刻度は増大の一途。革命前年の二〇一〇年には、政府との対峙が鮮明な諸事件が起きる。まず、「占領下」エルサレムへの訪問を禁じる二裁定。すなわち、(1)在外エジプト人で有力なイスラーム法学者のユースフ・カラダーウィが、訪問を違法とする判断によって、訪問を是認するアズ

した。人を固定した政治的色分けで見えてはいけない。人間は、思想を遍歴し融合させて、自己を変えていくからだ。

中東の市民決起は、各国ごと権威主義的強権体制の打倒にとどまらず、世界と「自分」とを変えようと志すところに眼目がある。「人間の尊厳 *karāma*」の回復が決起の倫理的動機のキーワードとして強調される。公言はせずとも、市民たちが変革しようと相手どっている現実とは、米国内イスラエルが差配する世界。市民らが直視していたのは、米国内が四半世紀にわたりその対外援助総額の半分近くをイスラエル・エジプト二国に注ぎ込んできたことの意味／カイロの米国外交館の要塞のような偉容に隠された米国の恐怖心／イスラエルの反人道的なガザ封鎖への米国内の独裁政権的をしばった。それは戦術的たくらみや陽動作戦ではない。中東の社会ではあまりに自明なこととして共有されている権力の立体構造の認識のためだ。

市民決起の意味を根底的に把握するには、パレスチナ人の絶滅・消去の「どん詰まり」が迫るパレスチナ問題の緊迫感が、アラブ民衆の心に渦巻く深層を見極めることが必要だ。ガザの圧殺的封鎖と西岸の断片化による民族浄化が「中東和平」の帰結点／欧米の道義的負債の「自己破産」プロジェクトである「反テロ戦争」とは預言者を侮辱

四 「新・市民革命」というとらえ方

中東各地で体制変革を求める市民決起が同時に現れだしたのを見て、二〇一一年一月末から私は、「二一世紀の新・市民革命」という概念を提案しはじめた。市民革命（アウレシヤ）に／から／つながる過去の諸革命を飛躍させる「市民革命（ムスリム）による革命」。

知覚・観察される現象、つまり人々の声／歌／詩／表情／身ぶり振舞い／掲げるスローガン／表明され書かれたテキスト／さえずりやブログのメッセージ／情報とその更新の伝わり方／個人や集団の行動様式／集会の秩序生成（安全確保・給水・食事・排泄・ゴミ処理・医療・紛争処理など）／

情勢の流動の中で変化の生じ方／等々／の洞察から、革命の新しい型および特徴的な傾向を抽出してみる。すると、ここから見えてきたのは、人類にとつて普遍性をもつ「新・市民革命」という「革命」概念の革新だった。

われわれの眼前で中東から展開しはじめた「二一世紀型」とも目すべき新しい市民革命の特質は、どのように整理できるだろうか。

▼「自由と自立」「人間の尊厳」を求め、非暴力の不服

情報循環とへの適合、少数者の尊重、「対話」の重視。

▼「真実を明らかにする和解」「自己批判と是正・補償」など修復的正義の重視と実践。

「人間らしく生きる」を回復・獲得・開花する歴史変革の担い手としての「市民」のあり方が、ここで問われている。新しい理論は、いつも新しい「課題」の自覚／新しい「現実」との遭遇／から導き出されてきた。これまで激烈な社会変化としての「革命」は、主権や政府をめぐる主導的役割を演じた身分・社会階級・階層・職能・民族・宗派・イデオロギー・カリスマなどの要素をモノサシにして説明されてきた。

国王を斬首し絶対主義に打撃をあたえたピューリタン革命につづき、国王をギロチンにかけて市民の共和国を実現したフランス革命は、市民革命の典型とされる（市民の共和国）の原型は七世紀イスラームの「ウンマ」だったが、これは無視されてきた。二〇世紀には、社会主義や民族的解放を目ざして、ロシア革命・中国革命などが起きた。それらをつうじて、第三身分のような「身分」差別／ブルジョアジーやプロレタリアートのような「階級」／抑圧される「民族」／などの解放を目ざす変革主体が考えられてきた。それらは歴史の各段階で意味をもっていた。だが二〇世紀に

し冒瀆するイスラーム全否定／これらが日々視覚化される。ユダヤ人に苦難として降りかかったホロコーストを本質的に批判しようとするなら、パレスチナ人が犠牲にされる現実を「紛争」などと言つて片付けられないはず。パレスチナ人に「和解と忍従」を押しつける非情な仕打ちが、世界大のあらゆる不条理と連結しているのだ。米國覇権の衰弱とイスラエル国家存立のリスク増大とが、中東市民に決起を促す条件であり、同時に、市民決起が促す結果ともなる。こうしてアラブ市民の怒りは、植民地主義・人種主義・軍国主義の横行が人間の「生」を辱めている世界を革命する要求へと、変わりはじめたのだ。状況への苛立ちとは、世界と自己とに向けられる。

だから、運動は、国から国へ「飛び火」するようなものではなく、単なる「民主化」要求でなく、ツイッターやフェイスブックのおかげで成り立つ「若者革命」でもない。まして、中東の中の親米政権が標的であるどころか、イランやシリアの体制、パレスチナ人指導部もろもろ、従来型イスラーム運動諸潮流など、グローバル体制のあらゆる構成要素に対して噴出する性質のものなのだ。そこからオトコ中心主義への批判が生まれる。

従・抗議・抵抗をつらぬく直接行動（二〇世紀初めマハトマ・ガンディーがムスリム同胞との協働の中で拓いたサティヤグラハ「真実への執着」運動の伝統を受け継ぐ）。「世界の」体制変革」志向と「自己（の生き方）変革」志向との接合。

▼ネットワークとパートナーシップというタウヒード（多即一・多元主義的普遍主義的組織原理）。

▼「正義・公正」と「安全」という価値実現を目ざすためまぬ努力。欧米と日本が世界史にもちこんだ資源・市場支配の軍事化されたモノカルチャー型・大量生産型産業主義から、グローバルな競争と格差拡大を煽る市場原理主義で人権を蔑ろにする米國主導下の新自由主義まで、資本主義的逸脱・彷徨・教唆誘導・腐敗に対する倫理的批判。

▼植民地主義・人種主義・軍国主義・オトコ中心主義に反対し、「生命の大切さ」「自由と自立と平和と共生」・「融通無碍に相互ケアしあう社会」「自然環境」「バヌー・アーダム *Banu Adam*（アダムの子孫たち＝人類）的連帯」の強調。

▼生物多様性・文化多様性・宇宙多様性の尊重。個別性・差異性・多様性・等位性・関係性を体現する「自然」への畏敬、宇宙的「公益」に反する作為的操作を排し生態系の調和とおのずからなる物質循環・エネルギー循環・

は、労働同盟／人民戦線／統一戦線／民主主義革命／構造

改革／文化革命／市民フォーラム／等々／さまざまに新しい問題意識が現実化した。社会運動の実践面では「民衆」／「人民」／「大衆」／の意味を豊富化する動きがなかったわけではない。だが、理論面ではイデオロギー的解釈が肥大・不毛化して裂け目の取り繕いに追われた。二〇世紀社会主義が潰えてからは、「民主化」の文脈でピロド／オレンジ／バラ／ジャスミン／といった革命の形容詞的ネーミングが量産されはじめた。

二〇一一年中東を覆う市民決起わけでもエジプト革命に立ち会つて(すでに鳥瞰したように世界中が内発的に立ち会っている)、そこに何を讀みとるか。世界史に対するわれわれの主体的かわり方と感覚・直観が、問われている。アンシャン・レژیムのどん詰まりバスターイーユ蜂起の半年前に「市民革命」の担い手を指さしたシエイエスのごとく、また米国内乱や国際労働者協会を体感・体験したのちパリ・コミューンに遭遇したカール・マルクスが「具体的な言葉づかいで共産主義を構想した」ごとく、われわれはいま目撃している中東の革命に新しい社会・世界を産み出す変革の発端を認めて、そこから新しい普遍的な変革主体の結集軸を理論化するべきではないか。

たる月、兄たる太陽、野原の鳥たち、貧民や搾取された人びとが……集つて権力や腐敗の意志に抵抗する。……これは革命だ。いかなる権力も統制できない革命」。しかしネグリたちは、この愛のプロジェクトが、かの聖者のエジプトなど東方世界への旅と切り離しては考えられぬという可能性には、目を向けない。

先述の私の視座を思い出してほしい。中東の社会は、古来、都市化・商業化・政治化の過程の中で個人主義・合理主義・普遍主義をはぐくみ、ネットワークとパートナーシップの組織原理を活用してきた。ここでは、可変的で伸縮自在な生活・思考空間の主体的組み換え(地域)とネットワーク化された多様な自己の選り分け(アイデンティティ複合)とが顕著。中東は「市民」「市民社会」の元祖であり、イスラームは都市を生きたる生き方を思想的・実践的に体系化したもの。タウヒードの関係主義的全体論の論理は、イスラームが世界的に展開させはじめた超近代性の土台をなす。そこからヨーロッパというローカルな過程だけを切り取って「近代」の粹と決めるのが欧米中心主義。この視野狭窄を克服しないと、イスラーム的ネットワーキングから始動した近代性の歴史を見誤る。

トマス・ホップズの「自然状態」であれジョン・ロールズの「原初状態」であれ、「社会契約」が取り決められる

五 「新・市民革命」の世界史的位置づけ

私が「新しい革命」の主体(担い手)と考える「市民」は、アントニオ・ネグリたちが新奇な世界とその時代状況を観察して、(ポストモダン)危機を秩序化した「帝国」のグローバル権力を打倒する政治的主体の在りかとして考察した「マルチチユード」と、かなりの程度似かよっている。「政治的なオルタナティヴ……は実践においてのみ生じる……」。……集団的实践が発揮する非凡な能力を通じて推し進められる……実験こそが……新しい社会的身体を創出する……」という彼らの見とおしにも、賛成だ。ネグリらはエジプトやチュニジアでいざれ起きることを言い当てていたように感じる。だが私が不満なのは、彼らがせっかくスピノザからヒントを得てマルチチユードを考えたのに、伝統的な欧米中心主義の思考から脱け出さず、西欧を中東やイスラームから切り離し、中東やイスラームを視野から遠ざけていること。(ポストモダン)の見方もそれだ。彼らの議論は、悦ばしくも見事に、「革命」の姿をアッシジの聖フランチェスコ伝説に托して結ばれる。「フランチェスコは生まれたての資本主義に異議を唱えながら、歡びに満ちた生を呈示した。あらゆる存在、自然、動物たち、妹

仮説的原点が想定されてきた。それは理論や思考実験の問題。抽象化されてしまった歴史過程の出発点として、具体的な契約文書の記録である「マデイーナ憲章」を見なおすべきだ。西暦七世紀、イスラームの社会的展開の開始期にこの契約をおこなったのは市民。その後の数世紀、ハワリージュ派、ファラービー、マーワルディー、イブン・ジャマア、イブン・タイミーヤ、イブン・ハルドゥーンら数多のムスリム知識人が「イマーム(指導)としての統治」の政治理論の多彩な諸説を考案する。十分に散開し終わつた感さえあるその営みの延長線上に、トマス・アキナス、マキアヴェッリ、一群の君主放伐論者、ジャン・ボダン、ホップズ、ボッシュエ、ジョン・ロック、ジャン・ジャック・ルソーらが立っている。東西分割のオリエンタリズムの見方でなく、このプロセス全体を通観すべきでないか。ひろい東方世界の一角だった(つまり、ヨーロッパの第一走者などではない古代ギリシアから、イスラーム・ネットワークのヨーロッパ展開までを、見渡す視野が必要だ。

「都市・商業・政治を生きたる」ところから結晶してきたイスラームの近代性は、以下のような特徴をもつ。被造宇宙の時・空には神的なるものをいっさい認めない徹底した条件付き「無神論」。そして強靱なタウヒード(多即二思考)したがって法と科学を重視する知識社会、ネットワーク化

社会。

欧米は、侵略戦争／交易／翻訳／イスラーム法に基づく条約関係参入／をつうじて、イスラームの近代性と連結した結果、自由・平等・同胞愛を学習する一方、市民革命をへて産業資本主義のグローバル市場を支配するようになる。肩肘張った欧米中心主義のために、二項対立的二分法・排中律・還元主義・モノカルチャー型産業主義・植民地主義・人種主義・軍国主義の毒をもちこんで、近代性に癌化をひき起こした。これが「ホンモノの近代」を僭称する。七世紀の国家成立段階から固有の植民地主義・人種主義・軍国主義を抱えていた日本社会は、欧米中心主義的「近代」に同調・同化する用意ができていた。

二〇世紀欧米の思想家たちがそんな「近代」に警鐘を鳴らしはじめると、この欧米中心主義批判が流行する欧米中心主義現象も世界にひろまる。中東はじめムスリム世界も、イスラームの近代性を忘却、タウヒードは劣化し、欧米中心主義に染まって中毒した。西洋のユダヤ教・キリスト教に敵対する二項対立の擒のイスラーム主義が昂進、現在はその極限に達したように見える。一方、皮肉なことに、生き残りを模索する欧米中心主義は、自覚的・無自覚的にこっそりタウヒード適応を遂げ、「ポスト・モダン」戦略を採るようになった。「ポスト・モダン」という造語は、

につづくリビア解体は、新・市民革命の喉元に突き付けられた刃だ。反革命は、米國覇権の衰退・イスラエルの孤立への切り返しとして、今後は肝腎のパレスチナ問題緊迫につけこみながら、「反テロ戦争」をさらに拡大することによって推進されるだろう。

ここで、欺瞞の機構としてのメディアの役割ばかりでなく、真実を歪める「専門知」の犯罪も暴かれなければならぬ。イスラエル批判を反ユダヤ主義と非難し／欧米中心主義批判をイスラーム中心主義と嘲笑する／ような偽善的言説の軽薄さは、新・市民革命によって白日のもとに曝された。中東の中心性があらゆる中心主義と対立するということも真実とともに。

仏・英・米などのリビア戦争に明確に反対する声が封殺されてしまった世界の中で、ラテンアメリカでは、多くの国で、歯切れよい反戦の叫びがあがった。わけても強硬に侵略停止・平和解決を要求したボリビアでは、ラディカルに環境共生を旨とする空前のパチャママ(母なる大地)法施行が争点となつてもいた。オトコ中心主義批判が新・市民革命前進の里程標となるに違いない。アラビア語の *muwatin* (市民)は、本来、*watan* (住みなす大地)と深く結びつき、そこで万物の支えあい・相補性という公共をシェアしながら生きる存在である。新しい文明の未来をひらく人類の苦闘

瀕死の欧米中心主義が、イスラーム的近代は見えないことにして「近代」の横領を死守する企てだ。新・市民革命の使命とは、「世界変革・自己変革」を普遍化して「超近代」の百花繚乱の時代をひらくことなのだろう。

六 反革命の様相

中東市民が自覚的な「政治主体」として立ち現われ、世界的にこれと呼応し交感する動きが生じる。これは世界革命の序曲。それだから、虹の記憶を滅却させ、局面を逆転させる反革命が即座に開始される。市民決起の乗っ取り／すり替え／歪曲。その手法は、主として「宗派的・「族的」エスニック対立の楔と、国連はじめ地域的国際組織の干渉と、である。これらは、植民地主義の道具である「中東諸国体制」の枠組が「市民」の政治主体化に対して刻印する不均質な条件によつても、助長される。イエメン、パレチン、リビア、シリア、サウジアラビア、……などでの多様な推移が、それを示す。リビアの場合は、「体制」側と「市民決起を横取りする」自称「反体制」側とが反革命勢力同士の内戦を演じ、これに乗じて欧米諸国が「リビア市民解放・アラブの春」救済・革命達成」を偽装しつつ、新植民地戦争の露骨な侵略行動に出る、革命潰し。イラク

は、待ち受ける悪路をのりこえて進んでいくだろう。

- (1) Erik Hornung, [transl. by David Lorton], *Athenaten and the Religion of Light*, Cornell University Press (Ithaca), 1999. [Original German edition: *Die Religion des Lichtes*, Düsseldorf & Zürich, 1995.]
- (2) 板垣雄三「歴史を貫く革命と連動する世界」『インパクト』第一五二号、インパクト出版会、二〇〇六年六月。山中由里子「アレクサンドロス変相―古代から中世イスラームへ」名古屋大学出版会、二〇〇九年。
- (3) いいたも編訳「民族・植民地問題と共産主義」社会評論社、一九八〇年。
- (4) 私は一九五一年五月『東京大学新聞』に「フランス革命と国際的契機」について書いた(筆者名は山極晃)が、コピーを失い、現在では詳細不詳。『資本主義的ヨーロッパの制覇』(東洋経済新報社「世界史講座第4巻」、一九五四年)所収の「エジプトの歴史」を、日本から見たエジプト近代史として書いたのが、公刊された最初。以後、「地域からの世界史」に焦点をおいたものとしては、「いずれも編者として執筆した」「歴史の中の地域」(岩波書店「シリーズ世界史への問い」8、一九九〇年)の「序章」／「世界史の構想」(朝日新聞社「地域からの世界史21巻」、一九九三年)所収の「はじめに」および「歴史の記憶と「世界」ビジョン」／そして板垣雄三「歴史の現在と地域学」岩波書店、二〇〇三年。板垣雄三「イスラーム思想史における公と私」(佐々木毅・金泰昌編『公と私の思想史』東京大学出版会「公共哲学」1、二〇〇一年)所収。板垣雄三「組み換え自在の「地域」を生きる」『飯田市歴史研究所年報』6、二〇〇八年。など。
- (5) 私の関心の所在はネットワーク原理にあり、クラスターや

史②) 未来社、二〇一〇年。

- (8) 二〇一一年に直近の発言としては、板垣雄三・佐原徹哉「聞き手」[中東で何が起きているのか? 文明戦略的な未来打開の道が問われる時代]「情況」情況出版)二〇一〇年十一月号。とくに四八〜九頁を参照。「エジプトなど……今や、変化が起きないまま進んでいく」はまったく不可能な状況……ムバラク体制はほとんど終わっている……現体制を超えることを考えている人たちがいろいろと模索している」。
- (9) 朝日新聞二〇一一年六月一六日15面(オビニオン「原子力と民主主義」)。
- (10) Maria Carrón, Sol Camp, Spain's "Indignant" Give Lessons in True Democracy. www.commondreams.org/view/2011/06/03-1
- (11) 二例を挙げれば、F. Gregory Cause II, Why Middle East Studies Missed the Arab Spring, *Foreign Affairs*, July/August 2011. エドワード・トッド(石崎晴己訳)「アラブ革命はなぜ起きたか? デモクラフィーとデモクラシー」藤原書店、二〇一一年。
- (12) これへの日本人研究者の着目と洞察の記録化集積が進行している。写真・映像・音声記録は多数あるが、ここでは以下に文字資料を例示。「現代思想」vol.394、青土社(四月臨時増刊号・アラブ革命、二〇一一年三月、収載)、大杉哲也「エジプト」二〇一五年革命」の社会史点描「公共性とコミュニティ」山本薫「メディア文化から見たエジプト。一月二五日革命」/栗田慎子+岡真理訳「エジプト革命」資料編「一月二五日デモ時々刻々、政治文書など」/小田マサノリ「25日ビデオ・ムービー・ログ」。山本薫による詩翻訳(アブドゥラフマン・アブヌーディ「広場」/ムスタファ・イブラーヒーム「名もなき者」/ヒシャーム・ジャッフ「タハリール広場からの断面」と解題「神奈川大

- モジュール性にかかわるネットワーク解析で言う「中間性(betweenness)」や「中心性 centrality」とは異なる。それらについては、アルバート・ラスロ・バラバシ(青木薫訳)『ネットワーク思考―世界のしくみを読み解く』日本放送出版協会、二〇一二年/ダンカン・ワッツ(栗原聡ほか訳)『スモールワールド―ネットワークの構造とダイナミクス』東京電機大学出版会、二〇〇六年/参照。
- (6) Yuzo Itagaki, *Civilizations to be Networked: Feasibility and Effects of Re-vitalizing tazukidai (Pluralistic Universalism)*, 『文明の轉換と世界化』大韓民国學術院、二〇〇七年。
- (7) 板垣雄三「対テロ戦争」とイスラム世界」岩波新書、二〇〇二年/同「反テロ戦争と地球的平和」公共哲学ネットワーク編『地球的平和の公共哲学―「反テロ」世界戦争に抗して』東京大学出版会「公共哲学叢書3」、二〇〇三年/同「現在の中東を取り巻く国際情勢への視点」中東調査会編『イラク問題と日本人』明石書店、二〇〇三年/同「イスラム問題」岩波書店、二〇〇三年/同「イラク戦争と二一世紀の世界秩序」藤原修・岡本三夫編「いま平和とは何か」法律文化社「グローバル時代の平和学」、二〇〇四年/同「反テロ戦争」のただなかで日露戦争を考えると「安田浩・趙景達編『戦争の時代と社会―日露戦争と現代』青木書店、二〇〇五年/同「反テロ戦争から脱却するには」『環』Vol.24「アメリカをどう見るか」藤原修、二〇〇六年一月/同「反テロ戦争の未来」『学際』No.9「構造計画研究所」、二〇〇六年一月/同「反テロ戦争」論の現在」木村朗編「9・11事件の省察―偽りの反テロ戦争とつくられる戦争構造」凱風社、二〇〇七年/同「世界の未来を透視する」『現代思想』vol.37-38、青土社、二〇〇九年三月/同「愛国愛教促団結」について―ムスリムと国家」田中浩編「ナショナリズムとデモクラシー 現代世界―その思想と歴史評論」第六九号、二〇一一年七月。八木久美子「グローバル化とイスラム―エジプトの「俗人」説教師たち」『世界思想社』二〇一一年九月。
- (13) 二〇一一年九月一日、東京・明治公園「やまゆなら原発」集会ステージからの武藤類子(ノイロマクシオン)福島原発40年実行委員会(スビーチは、これと符合するもので、「人間の尊厳」や「世界変革と自己変革」にあたる適切な日本語表現をあたえた。「私たちは馬鹿にするな。私たちのいのちを奪うな。……私たちは静かに怒りを燃やす東北の鬼です。……私は、この地球という美しい星と調和した、まっとうな生き物として生きたいです。……どうしたら原発と対極にある新しい世界をつくっていくのか。……本気で、自分の頭で考え、確かに目を見開き、自分ができるところを決断し行動することだと思えます。一人一人に、その力があることを思い出しましょう。私たちは誰でも、変わる勇気をもっていきます。奪われた自信を取り戻しましょう。……」。
- (14) Michael Hardt & Antonio Negri, *Empire*, Harvard U.P., 2000. p. 206. 'to make the leap and conceive communism in concrete terms'. マントニオ・ネグリア+マイケル・ハート(水嶋一憲ほか訳)『帝国―グローバル化の世界秩序とマルチチューードの可能性』以文社、二〇〇三年、二七〇頁。の訳文を借りる。
- (15) 註(14)に挙げた *Empire* のこと。 Michael Hardt & Antonio Negri, *Multitude: War and Democracy in the Age of Empire*, Penguin Books, 2005. p. xviii. 思索を深める。
- (16) 註(14)と同じ頁。
- (17) 註(14)と同じ書物 p.413. 同訳書五二二頁。
- (18) Paul Moses, *The Spirit and the Sultan: The Crusades, Islam and Francis of Assisi's Mission of Peace*, Doubleday, 2009.
- (19) イブン・イスハーク著、イブン・ビシャーム編註(後藤明

- ほか訳)「預言者ムハンマド伝」岩波書店(イスラム原典叢書、二〇一一年、三〇〜五頁「マナーナ憲章」。テクスト研究の近年の仕事として、Michael Lecker, 'The Constitution of Medina', *Muhammad's First Legal Document*, The Darwin Press, 2004.
- (20) 世界史②中のエジプト・フェニキヤとギリシアに光をあつた Martin Bernal, *Black Athena: The Afroasiatic Roots of Classical Civilization*, Vol. I [The Fabrication of Ancient Greece 1785-1985], 1986. 邦訳「アテナン・パナール(片岡幸彦監訳)「ブラック・アテナ―古代ギリシア文明のアフロ・アジア的ルーツ―古代ギリシアの捏造―七八五〜一九八五」新評論、二〇〇七年。
- (21) Nick Buxton, *The Law of Mother Earth: Behind Bolivia's Historic Bill*, *Yes! Magazine*, Apr. 21, 2011. <http://www.yesmagazine.org/planet/the-law-of-mother-earth-behind-bolivias-historic-bill>

【追記】

本稿の脱稿後(二〇一一年九月下旬以降)に生じた事象に関連して、二点だけ触れておく。①共鳴・共振の新展開。格差社会や戦争に抗議する「99%」の運動が米・英でも発生し拡大したのは、世界政治経済の構造の通俗理解に打撃をあたえる。②オトコ中心主義批判の里程標。「原発いらない福島の人たち」など反原発運動における母性原理の新しい兆しは、いま放射能の深刻な影響が憂慮される地域がかつて福島県に発する自由民権運動「激化」の諸事件の起きた地域と不思議に一致することから、日本社会の「革命」伝統の内実へのあらたな見なおしを迫る。(二〇一一年一月二二日記)

(いたがき ゆうぞう)